

野々宮の恋愛はなぜ実らなかつたのか

——「ベーコンの二十三頁」から読み解く〈恋愛〉と〈学問〉——

呉 俊 永

美禰子をめぐる三四郎と野々宮の男女関係を中心に繰り広げられる『三四郎』の作品世界は、美禰子が彼らのどちらとも結ばれることなく、まったく別の「立派な人」と結婚してしまつたところで幕が閉じられる。このあまりにも唐突な結末が作品世界においていかなる意味をもつのか、この問題は『三四郎』を読み解く上で重要な鍵となつてきた。従来の研究では、美禰子の結婚を彼女の「主体的な未熟さ故の敗北¹」と捉える見解と、「自主的な選択²」と捉える対立的な見解が止揚されることなく通説化されている。これに対して平岡敏夫は、新しい解釈の可能性として美禰子の結婚相手である「立派な人」の読みを提示している³。その当否はいまは問わないとして、これらの論考に共通していることは、美禰子の造型を考える上で重要な野々宮と美禰子の関係に対する考察が見当たらないということである。

本稿では、すぐれた物理学者として登場する野々宮の人物像を読み直し、その上で美禰子の結婚のもつ意味を考えてみた

い。野々宮に注目するのは、次の二点に疑問を抱くからである。まず、作者は作品の始発以前から野々宮と美禰子を恋愛関係に置きながら、なぜ二人の破局を用意したのかという点。そして、作者は野々宮を前述のごとく造型しながら、なぜ彼の学問に対しては批判的な態度をとっているのかという点である。以上の疑問を前提に据えながら作品を読み直すとき、「学問」のために恋愛感情を失つた「不具^{かたが}」的な存在としての野々宮像が浮かび上がってくる。

ところが、美禰子を「無意識の偽善者」や「露悪家」と捉える多くの論は、野々宮をすぐれた物理学者という肯定的な人物として捉え、破局の原因を美禰子の方に求めようとする。例えば、「野々宮の真価を見抜けず⁴に他の男と結婚する美禰子こそ、作者に『見限られた』に他ならない」とする秋山公男の論考が挙げられよう。氏はおそらく野々宮の学問に対する情熱やその成果を高く評価したと思われるのだが、問題なのは、野々宮の「学問」と人格を同一視する点である。野々宮の「学問」が彼の社会的地位を示す尺度となりえても、それが必ずしも美禰子にふさわしい男性としての価値にはならない。実際、美禰子は

その「学問」によって二人の心の交流が閉ざされていくことに気づき、悩まされたのである。

美禰子は野々宮の「望遠鏡」（＝顕微鏡）のレンズを通してつねに「観察」される研究対象であり、美禰子の結婚は彼の論理・法則（学問）の拠り所である。「望遠鏡」に対する反発と意味づけられよう。こうした二人の男女関係は、冒頭部に提示された「ペーコンの二十三頁」の言説、すなわち男の「偉大な事業」と恋愛の相剋という問題をふまえた上での設定といえるが、野々宮が物理学者として登場する背景には、科学を人間の「情愛」を圧殺する領域に位置する学問として捉える作者の科学観がある。

二

野々宮と美禰子の関係を考察するに当たって、まず上京する際の三四郎の内面の動きに注目する必要がある。「ペーコンの二十三頁」を読んでから野々宮に会うまでの三四郎の設定とプロットそのものにこそこの作品のテーマとなるべき契機が託されており、東京という都市文化圏に参入してきた地方青年三四郎の視線によって野々宮と美禰子の関係が相対化されるからである。

三四郎の上京の旅で注意されるのは、「ペーコンの二十三頁」を読んだときの三四郎の認識である。三四郎は「汽車の女」の挑発で受けた驚きや畏怖をいやすために、「ペーコンの二十三頁」を開く。三四郎には最初からそれを読む気がなかったと

し、また「読んで解らない」ものが「運悪く当選した」などと説明されているが、それでも三四郎は「二十三頁の前で二応昨夜の御凌をする」了見でそれを「恭しく」「万遍なく」見廻している。「汽車の女」の事で悩んでいた三四郎だけに、恋愛について説く「二十三頁」から少なからず影響を受けたらうことは充分推測されるのだが、そうした痕跡は、例えば「無暗に女に近付いてはならない」と考えながらも、「丸で不具かたわにでも生れた様な」気分を振り落とすことができなかつたときの三四郎の内面に見ることができる。

三四郎は急に気を易へて、別の世界の事を思ひ出した。

——是から東京に行く。大学に這入る。有名な学者に接触する。趣味品性の具つた学生と交際する。図書館で研究をする。著作をやる。世間で喝采する。母が嬉しがる。と云ふ様な未来をだらしなく考へて、大いに元気を回復して見ると、別に二十三頁の中に顔を埋めてゐる必要がなくなつた。(一五)

三四郎は「汽車の女」の事から逃れようとして、あえて自分の上京の目標を想起させている。学問という目標は、内田道雄の指摘するとおり「上京という行為を起す原動力」といえよう。が、ここで注目したいのは、それが「二十三頁」に対する反動として意識的に思い出されている点である。そこには、「二十三頁」に象徴される恋愛の世界を学問の世界と相容れないものとして捉える三四郎の認識が働いており、このことは、「偉大

な事業」を成し遂げるためには、「恋愛の如き柔弱なる感情から離れ」なければならぬと説く。「二十三頁」の教示に三四郎が改めて共鳴していることを物語る。

しかしながら、後に三四郎が美禰子に出会った時点で描いている未来図を見ると、「国から母を呼び寄せて、美しい細君を迎へて、さうして身を学問に委ねる」というふうになっている。

「結果は頗る平凡である」といわざるをえないが、それでも三四郎としては「此結果に到着する前に色々考へた」すえの結論である。みづからも「夫程平凡ではなかつた」と打ち明けているが、それでは「頗る平凡である」三四郎の結論の裏面に横たわる苦悩とは何であらうか。それは、母・細君・学問という順序から分かるように、「未来に対する自分の方針」を変えざるをえなかつたところにある。母を呼び寄せた上で細君を迎えるということは、いかにも田舎育ちらしく、そこには〈家〉制度による結婚を前提とする認識が働いている。田舎には三四郎を待っている御光があり、母の手紙にはいつも御光の消息がしたためてある。母は御光を息子の将来の嫁として考えており、そうした事実を絶えず三四郎に喚起させているのだ。だからこそ、母の期待とは裏腹に美禰子を「美しい細君」として想定するところに、三四郎の「平凡ではな」い苦悩がある。また、嫁を貰つて「さうして身を学問に委ねる」と考えるところにも、三四郎の苦悩がひそんでいる。「ペーコンの二十三頁」の教示どおり、女の事を頭から駆逐した三四郎だが、美禰子に囚われてからは「未来に対する自分の方針」を変えるしかなかつたのだ。

ところが、三四郎の目標は、実は学問の世界を象徴する野々

宮に出会った瞬間からすでに揺れ始めたのである。三四郎が初めて野々宮を訪ねたときの印象を見てみよう。

穴倉の底を根拠地として欣然とたゆまずに研究を専念に遣つてゐるから偉い。然し望遠鏡のなかの度盛がいくら動いたつて現実世界と交渉のないのは明らかである。野々宮君は生涯現実世界と接触する気がないのかも知れない。

(二)の三

三四郎は学問に専念する野々宮に対して畏敬の念を抱きながら、その一方で野々宮が現実世界と遊離した生を送っているとも思う。この野々宮に対する印象に三四郎の意識が前景化されていることは確かだ、そこには学問の世界を女の世界と相容れないものとして捉えようとする三四郎の認識が投影されている。三四郎が「現実世界」を女の世界としても捉えていることは、この直後、自分も「活きた世の中と関係のない生涯を送つて見ようかしらん」と思つたとき、すぐさま「薄雲の様な淋しさ」や、生まれてはじめて味わう「孤独の感じ」にみまわれること、そしてその孤独が「女の事」に連動して生じていることから充分にうかがえる。現実世界（女の世界）が「どうも自分に必要らしい」と思ひ込む三四郎は、この直後美禰子に出会うのだが、彼女が落とした花を拾い、それを嗅いでみるといった仕草に象徴される如く、ひたすら彼女の言動の前に悩まされる運命に陥っていくのである。

この場面は、そうした三四郎の運命を先取りしている点で重

要な意味をもつ。同時に、野々宮と美禰子の恋愛関係を暗示する点で注意される。つまり、野々宮の学問（＝当為）は賞賛されるべきものに違いないが、それが男女の恋愛において果たしてどのような意味をもつのか、という問題が提示されているのである。このことは、野々宮の研究室から出た三四郎が池のほとりで美禰子に出会う場面にリフレインされる。

三四郎は茫然ぼうぜんしてゐた。やがて、小さな声で「矛盾だ」と云つた。大学の空気とあの女が矛盾なのだか、あの色彩とあの眼付が矛盾なのだか、あの女を見て、汽車の女を思ひ出したのが矛盾なのだか、それとも未来に対する自分の方針が二途に矛盾してゐるのか、又は非常に嬉しいものに対して恐を抱く所が矛盾してゐるのか——この田舎出の青年には、凡て解らなかつた。たゞ何だか矛盾であつた。

（二の四）

三四郎は「大学の空気」と「あの女」との間に「矛盾」を感じてゐる。才氣と教養にめぐまれた美禰子が「大学の空気」と矛盾するところなどはどこにもないはずだが、三四郎はその両者の間に「矛盾」を感じたのである。それは、美禰子を学問の徒としてではなく、へ女」という性として見ているからにはかならない。

この作品は三四郎の視点を通して語られており、したがって登場人物のうち三四郎の内面しか語られていない。しかしながら、語り手の叙述には「三四郎の視点だけではなく、それを異

化し脱構築する視点も含まれている」。⁹⁾三四郎に寄り添いつつ、「三四郎の行動の仕方や認識の仕方やの特徴をわざわざ読者に喚起していくかのように叙述を進めていく語り手」¹⁰⁾の叙述は常に三四郎の言動を相対化し、「物語内容への注釈」¹¹⁾的な機能を果たしている。引用の部分には、三四郎のまなざしを通して野々宮と美禰子の恋愛が「大学の空気」（学問の世界）と「あの女」（恋愛の世界）にアナロジーされ、ひいては成立し得ないものとして暗示されている。「大学の空気」と「あの女」がなぜ矛盾するのか。その答えは、若い女性の斃死事件を語る語り手が代弁している。

野々宮君の呑気なものには驚ろいた。三四郎は此無神経を全く夜と昼の差別から起るものと断定した。光線の圧力を試験する人の性癖が、かう云ふ場合にも、同じ態度であらされてくるのだとは丸で気が付かなかつた。年が若いからだらう。（三の十一）

斃死体を眼にしなかつたことを残念がつている野々宮の態度に対して、三四郎はそうした非情な性格がどこから起因するかまったく見当が付かない。その理由を語り手は三四郎の若さ（経験の浅さ、あるいは世間知らずの迂闊さ）に求めようとするが、それは三四郎の未熟さや迂闊さを語るためのものではない。他人の死に接しても、何も感じられない野々宮の非人情的な性格が彼の本領である学問によって形成されたという事実を読者に伝達するところに主眼が置かれている。そこには、すぐ

れた学者として登場する野々宮に対する作者の批判的な視線がある。三四郎が上京する以前から野々宮と美禰子を交際の関係に置き、野々宮を才知と教養にめぐまれた美禰子の交際相手としてふさわしい、すぐれた学者に造型した作者でありながら、野々宮の学問に批判的な態度をとっていることに注目する必要がある。

つまり、三四郎の行動や認識を相対化する語り手の叙述が彼の無知や単純さを読者に語りかけるとともに、すぐれた学者という固定された野々宮の人物像からその鍍金を剥がしとる機能をも果たしているのである。野々宮を美禰子の「夫になる資格」を有した人物として持ち上げている与次郎の発言などは逆に、野々宮を鍍金する代表的な例として挙げられよう。三四郎の視線を通して相対化される野々宮像に注目し、すぐれた物理学者という装飾から彼を解放した上で、野々宮と美禰子の恋愛関係を捉え直すことによつてこそ、美禰子の結婚の意味が明らかになる。

三

三四郎の視線に「矛盾」するものとして映った野々宮と美禰子の恋愛は、以降二人の対話の場面において、ある出来事や事物に対する態度（認識）のずれを通して具体化されていく。「空中飛行器」の対話場面はその一つであるが、野々宮と美禰子が始めて言葉を交わす場面において、当時まだ充分知られていない「空中飛行器」⁽¹²⁾が話材になっている点は興味深い。それは

野々宮の学問が先端的なものであることを示し、すぐれた学者としての野々宮を浮き彫りにする。と同時に、引用の最後の「三四郎は落語のおちを聞く様な気がした」とある一文と相俟つて、〈落ち〉を迎えるべく二人の関係を暗示しているからである。

「野々宮さんは、理学者だから、なほそんな事を仰しやるんでせう」と云ひ出した。話しの続きらしい。

「なに遣らなくつても同じ事です。高く飛ばうと云ふには、飛べる丈の装置を考へた上でなければ出来ないう極つてゐる。頭の方が先に要るに違ないぢやありませんか」

「そんなに高く飛びたくない人は、それで我慢するかも知れません」

「我慢しなければ、死ぬ許ですもの」

「さうすると安全で地面の上に立つてゐるのが一番好い事になりますね。何だか詰らない様だ」

野々宮さんは返事を已めて、広田先生の方を向いたが、

「女には詩人が多いですね」と笑ひながら云つた。すると広田先生が、

「男子の弊は却つて純粹の詩人になり切れない所にあるだらう」と妙な挨拶をした。

野々宮さんはそれで黙つた。(中略)

「今のは何の御話なんですか」

「なに空中飛行器の事です」と野々宮さんが無造作に云つた。三四郎は落語のおちを聞く様な気がした。(五の五)

この場面は、一見「理学者」「詩人」という言葉に象徴されるように、科学万能主義的な思考と感性的な思考の対立が対話をちぐはぐにしているかのように見える。しかし実は、そうした二人の対照的な性格がいまの対話をくるわせているのではない。

それは、美禰子が男女の親密さを増すためのコンテキストにとどまろうとするのに対して、その話題を受ける野々宮の発話は「科学」のコンテキストに移行しようとするからである。親密な関係をもたらすためのコミュニケーションにとつては、コミュニケーションそのものが目的であつて、そのきつかけをなす言葉の意味自体は二次的な目的しかもたないことは、談話の実際から誰もが感ずるところだろう。美禰子にしても、話を切り出した際に「飛べる丈の装置」などを考えることはまずないだろう。それは男女の間の交流というコンテキストに即した感情の表出であつて、当然ながら理屈は排除されているはずである。それは野々宮が皮肉るごとく、決して美禰子が「詩人」的な氣質を存分にもつていたから発せられるようなものではない。

野々宮は広田先生の同意を求めることで自分の立場を正当化しようとする。広田先生は野々宮の発言を性差の問題に拡大することで野々宮に対する配慮を見せるのだが、その応答には深長な意味が含まれている。広田先生のいう「純粹の詩人」とは、相手の自然な感情を素直に受け入れ、かつ理解しようとする人間的な指す。なぜ美禰子が飛びたいと言ったのか、その気持ちを理解せずには、二人の心は通じ合わない。法則や論理な

どももつて美禰子からの感情のシグナルを遮断しては、二人の恋愛は決して実ることはあるまい。

この対話場面を見て、「光線の圧力を試験する人の性癖」が、人の死に対しても何も感じられない野々宮を作り上げたとする作者の冴えた視線を想起することは有効であろう。また、学問好きの兄は「情愛が薄くなる」しかないと見る妹よし子の評や、「物理学者」の観察態度をもつて「人間の研究」に臨んではいけなさと説く広田先生の執弁を思い出してもよからう。そのいづれも、「理学者」対「詩人」といった、一見同じ重量感をもつて対比されているかのように見える、その対立構図の裏面に隠された事実、すなわち美禰子の恋愛相手として「物理学者」が登場しなければならぬ必然性を説明してくれるからだ。

漱石は科学者の本質について次のように書いている。「科学は如何にしてといふこと即ちHowといふことを研究する者で、何故といふこと即ちWhyといふことの質問には応じ兼ねるといふのである」(『文学評論』、傍線引用者)と。しかし、科学は「如何にして」という段階に至る前に、「何故」という疑問がその前提に据えられるはずだから、この捉え方には疑問が残る。この問題については、漱石の捉え方に当時の科学観が反映されていると推論する小山慶太の論考¹³⁾があるので、それを参照されたい。

ただ、ここでは、この言説がまさに野々宮の談話のコンテキストそのものとなっていることを注目したい。そのコンテキストから、「理学者」野々宮その人のあり方が読みとれるからで

ある。野々宮が「如何にして」というプロセスを追究すればするほど、「何故」という思考体系は薄らいでいく。その野々宮にとつて、「如何にして」を省いて思考する人はみな「詩人」になりかねないだろう。しかし、自分の学問の領域と人間同士の交流の場を同一視する野々宮こそ、本来相容れないはずの学問と情愛、言い換えれば〈当為〉と〈自然〉の差異を理解しようとしないう誤謬を犯しているのではないか。

このように見たとき、この場面を設けた作者の真意が、野々宮と美禰子の対立的な性格を描写するところにあつたのではないということがいえる。新保邦寛は明治後期の文学の主要な課題に〈科学と文学の調和〉ということがあつたと言及しているが、この場面からは、科学的な思考や論理をもつて果たして人間という存在を理解し得るだろうかと問いかけようとする作者の態度が汲み取れる。理性の発達ゆえに感性が失われつつある野々宮に恋愛の成立が可能なのかどうか。「ペーコンの二十三頁」の言説に即していうならば、学問という〈当為〉のために人間の〈自然〉としての恋愛感情を喪失した野々宮を描くことで、当時の青年たちが抱えていた問題、〈当為〉と〈自然〉の相剋問題を提示しようとしたのではなからうか。

野々宮と美禰子が描かれている場面をもう一つ追つてみよう。

美禰子は其間に立つて、振り返つた。首を延ばして、野々宮のある方を見た。野々宮は右の手を竹の手欄てりかきから出して、菊の根を指しながら、何か熱心に説明してゐる。美禰

子は又向をむいた。見物に押されて、さつきと出口の方へ行く。(五の六)

菊人形の見物中、雑踏のなかで一行と離れて先に歩いていった美禰子が野々宮の方を振り返る場面である。ここに描かれた二人の視線のズレが、以降二人の破局を暗示していることは周知のことである。ただし、そのズレが「理学者」「詩人」といった対照的な性格の差に拠るものではなく、野々宮の場はずれない関心（理学者たる本質）に起因することを見逃してはならない。

一行が菊人形を見に団子坂まで足を運んだ目的は、広田先生の言葉を借りていえば、「人形の心に、菊を一面に這はせて」作つた菊人形の美を鑑賞するところにある。だが、野々宮は菊人形の作り出す美的世界には興味をもてないらしく、専ら「菊の根」の部分に関心を示す。彼が「熱心に」説明しているのは、ほかならぬ「菊の培養法」だったのである。野々宮の眼には「菊人形」もまた「雲」や「空中飛行器」と同じく、「研究」対象としてしか映らない。つまり、「如何にして」咲くのかという「How」のレベルでしか菊の花を見られないのだ。

漱石は『文学論』（明治四〇年五月）のなかでも、科学者の研究態度についてふれている。そこには、科学者は事物の「全形を見て其儘に満足するものにあらず、必ずや其成分を分解し、其各性質を究めざれば已まず」とある。そして、「複合体にあまんずることなし」科学者は、「之を原素に還し、之を原子に分かとうとして」「百倍乃至千倍の鏡を用ゐて其目的を達せんとす」のだが、「さて如此き分解の結果は遂に其主成分より成

立せる全形を等閑視すること屢にして、又之を顧るの必要なことも或る場合に於ては事実なりと云ひ得べし」と、科学者の陥りがちな盲点を指摘している。野々宮がつねに「暗い穴倉」で「望遠鏡」（＝顕微鏡）を覗き込んで光線の圧力を測る人物として設定された背景をこの言説に求めてよかろう。

この部分を援用すれば、広田先生がなぜ「人工的に」作られた菊人形を「見て置く必要がある」といったのか、その真意がおのずと伝わってくる。かつて「純粹の詩人になり切れない」野々宮の欠点を指摘した広田先生であれば、「全形」としての菊人形に満足せず、「必ずや其成分を分解し、其各性質を究めざれば已ま」ない野々宮の「理学者」たる本質を見抜いていたはずである。それゆえ、一個一個の菊の花によつて作り上げられた菊人形、すなわち「全形」の存在意義を直接眼に触れさせることで、それを「等閑視する」彼自身の盲点に気づかせようとしたのである。

これまで美禰子は野々宮の学問を高く評価し、声援を惜しまなかった。与次郎が美禰子の「夫になる資格」を有する人物として野々宮を挙げたのも、その根底においては野々宮に対する美禰子のこのような理解があったためであろう。ところが、野々宮と過ごす時間が重なるにつれて、自分の心が伝わらないことに気づき始めたのである。美禰子が野々宮を後に残して「さつさと出口の方へ行」つたのは、彼の本質をはつきりと見抜いたからにはかならない。この直後、美禰子の眼に表れた「靈の疲れ」「肉の弛み」「苦痛に近き訴へ」は、おそらく野々宮の学問に感銘して彼を尊敬するようになったのだが、その学問によつ

て「情愛」の涸れてしまった野々宮の心に触れるようになった頃から、〈自然〉と〈当為〉の間でさまよう自己の〈感情〉の孤立を知らされた苦悩の表出といつてよかろう。自意識の強い美禰子は、この時点で野々宮を見限つたのかも知れない。彼女の口から洩れた「大きな迷子」という言葉が、そうした彼女の心境を暗喩するものとなっているからである。

松下浩幸は、登場人物の男たちが独身であり、彼らが「読書」を媒介に共同体を形成していることを指摘し、美禰子を彼らに読まれるテキストとして捉えている¹⁵。美禰子が「迷える子」を繰り返して洩らした後、三四郎に「私そんなに生意気に見えますか」と「真面目」に聞く場面を氏の見解に照らせば、その意味が明確になってこよう。美禰子の「其調子には弁解の心持がある」とされているが、それは自分が男たちに誤読されることに對する恨みの表出にほかならないからである。

漱石からすれば、〈自然〉と〈当為〉の絶えざる葛藤にこそ人間存在の意義があるのだ。冒頭部で、三四郎が「すると無暗に女に近付いてはならないと云ふ訳になる」と思いついたとき、「丸で不具にでも生れた様な」窮屈さを感じる場面は、その葛藤がどれほど深刻だったかをうかがわせる。その一面だけを信奉すれば、それは人間として「不具」にすぎない。以降三四郎がその〈自然〉を取り戻そうとして、却つて美禰子の「奴隷」になる運命に陥るのだが、その三四郎を〈自然〉「だけしかもたない」「不具」的な存在とするならば、〈当為〉ばかり追究してきた野々宮は〈自然〉を失つた「不具」的な存在といえよう。美禰子の結婚に「かれらへの痛烈な批評がある」とするな¹⁶

らば、まさにこの点にある。それは、青年たちの生活様態を描いたこの作品のテーマにほかならない。

四

先述したように、「空中飛行器」の対話場面に露呈されている齟齬や「菊人形」見物場面に表れている視線のズレは、二人の性格の差異というより、科学的な思考を恋愛の場に持ち込んだ野々宮の資質に拠っている。その二つの場面は、科学という学問領域をもって恋愛という男女交流の領域を理解することがいかに困難であるかを示唆する。作中人物の中には、そうした事実を感知していた人物がいる。妹のよし子と広田先生である。かつて美禰子は「野々宮さんは、理学者だから、なほそんな事を仰しやるんでせう」と言い放ったことがあるが、よし子と広田先生はそれぞれ美禰子と同じ文脈で野々宮を把握し、批判するのである。

第五章に、美禰子と野々宮が恋愛関係にあることに気づいた三四郎が、その事実を確かめるためよし子を訪ねる場面がある。そのとき、よし子は三四郎に自分の兄が好きか嫌いかと聞き出し、自分がなぜそのような質問をするようになったのかその理由を説明する。

研究心の強い学問好きの人は、万事を研究する気で見、
から、情愛が薄くなる訳である。人情で物を見ると、凡て
が好き嫌ひの二つになる。研究する気などが起るものでは

ない。自分の兄は理学者だから、自分を研究して不可ない。自分を研究すればする程、自分を可愛がる度は減るのだから、妹に対して不親切になる。けれども、あの位研究好きの兄が、この位自分を可愛がつて呉れるのだから、それを思ふと、兄は日本中で一番好きな人に違ないと云ふ結論であつた。(注―傍点引用者) (五の三)

この兄への評を見ると、よし子が「理学者」の本質を充分理解した上で兄を評したとは思われない。「人情で物を見ると」なぜ「凡てが好き嫌ひの二つになる」のか、またそれがなぜ「研究する気」を呼び起こさないのか、というところの論理は釈然としない。論理と感情がないまぜとなっているこの評は、彼女独自の性格批評とみるべきである。しかしながら、兄を情愛が薄い人物と見、その原因を兄の学問に求めている点は注目値する。野々宮の学問がみずから無神経な人間に作り上げたとする語り手の指摘と符合するこのよし子の捉え方は、兄の中に「当為」と「自然」の相剋を読みとっているからだ。

よし子が三四郎の訪問目的を知っていたわけではないものの、それが美禰子と野々宮の関係を確かめるどころにあつただけに、この評が二人の関係を照らす伏線として機能していることは言うまでもない。兄妹という関係を抜きにしたところの作品世界において、よし子の言葉のもつ真の意味は、野々宮と美禰子の恋愛が成立し得ないものであることを暗示する点にある。

学問と情愛の関連性に曖昧さを残しているよし子の評に対

し、広田先生はそれをおぎなうかのように、物理学者の研究態度が人間同士の交流の場においてもたらず弊害を指摘する。広田先生は「西洋軒の会」の席上で、「どうも物理学者は自然派ぢや駄目の様だね」と、「物理学者」と「自然派」を並行させた妙な発言をする。自然現象を観察する物理学者と、ありのままの実像を写す自然派であれば、両者の間には緊密な類似性があるように思われるかも知れないが、実際においてはそうではない、ということになる。

広田先生がこの「満場の興味を刺激」するような発言をしたのは、知識人たちの集まった場を借りて野々宮を粗上にのせるためであった。広田先生の意図どおり「本人の」野々宮が異議を唱えるのだが、それに対して広田先生は次のように説明を続ける。

「だつて、光線の圧力を試験する為に、眼文明けて、自然を観察してゐたつて、駄目だからさ。彗星でも出れば気が付く人もあるかも知れないが、それでなければ、自然の献立のうちに、光線の圧力といふ事實は印刷されてゐない様ぢやないか。だから人巧的に、水晶の糸だの、真空だの、雲母だのと云ふ装置をして、其圧力が物理学者の眼に見えるやうに仕掛けるのだらう。だから自然派ぢやないよ」

(九の三)

要するに、人工的な装置を仕掛けずに、肉眼でありのままの自然（観察対象の実像）を捉えようとするのが自然派の態度で

あるが、そのような観察態度では眼に見えない部分は捉えられない。そこで物理学者は、眼に見えない部分まで捉えるために、「人巧的に」ある装置を仕掛ける。人為的な仕掛けを工夫するところにすでに観察者の主観が介入するのだから、自然派の態度ではない。いわば「浪漫派」的な発想ではないか。ところが、当人の物理学者たちは自身では自然派の態度で観察すると信じ切っているから困る、というのが広田先生の趣旨である。

これに対して野々宮は「然し、一旦さういふ位置関係に置いた以上は、光線固有の圧力を観察する丈だから、それからあとは自然派でせう」と応酬する。広田先生の主張に一応首肯しているものの、装置を仕掛けた以降の段階に執着する態度からは、彼の観察の主眼がどこに置かれていたのが推測される。物理学者は見える部分を捉える「眼」と、その裏面に隠されている見えない部分を捉えるもう一つの「眼」が共に必要だと広田先生が言っているにもかかわらず、野々宮の反駁は見えない部分を捉えるための「眼」に全く気づいていないことをみずから白状しているのだ。広田先生の狙いはその点にあったというべきだろうが、それはその片目をもって人間を観察してはいけないという結論に至る前の段取りでもあったのだ。

「左うかも知れないが、斯う云ふ事は人間の研究上記憶して置くべき事だと思ふ。——即ち、ある状況の下に置かれた人間は、反対の方向に働らき得る能力と権利とを有してゐる。と云ふ事なんだが。——所が妙な習慣で、人間も光

線も同じ様に器械的の法則に従つて活動すると思ふものだから、時々飛んだ間違が出来る。怒らせやうと思つて装置をすると、笑つたり。笑はせやうと目論んで掛ゝると、怒つたり。丸で反対だ。然しどつちにしても人間に違ない」
(注—傍点引用者) (九の三)

広田先生の発言の目的は、「人間の研究上記憶して置くべき事だ」という言葉に集約されている。つまり、物理学者(野々宮)の学問上の観察態度をもつて「人間の研究」(美禰子)をしてはいけないということである。高田誠二は、広田先生の主張を「自然科学の法則と個人の活動原理との違いを宣言したものと捉え、「この見地からの人間関係の描出は漱石の作品のあちこちで実行されている」とする。確かに広田先生の主張は、物理学者が必然的にもつある否定的な側面——人間と人間が関係を生み出してゆく世界にとつての否定的な側面——を暴き出している。それをこの作品世界に即していうならば、野々宮と美禰子の恋愛においての否定的な側面にほかならない。具体的にいえば、人間の〈自然〉を無視・圧殺してでは男女の恋愛は成立しないということである。

広田先生の「人巧的」という言葉は野々宮の矛盾を暴き出すキー・ワードとなっており、「印刷されてゐない」自然、すなわち美禰子の自然な内面の動きを捉えるべくその作為が二人の関係のなかでは全く機能していないことが分かる。広田先生は「時々飛んだ間違が出来る」と、二人の破局が間近に迫っていることを仄めかす。そしてまた「然しどつちにしても人間に違

ない」と、二人の破局の原因が美禰子にあるのではなく、観察者の野々宮に存するのだという事実を知らせてもいる。美禰子の結婚は、「ある状況の下に置かれた人間は、反対の方向に働らき得る能力と権力を有してゐる」という言葉に暗示されているように、「人間も光線も同じ様に器械的の法則に従つて活動すると思ふ」野々宮からの解放といえよう。

五

野々宮はその名が外国にまで知られるほど、学問的にはすぐれた業績を積んだ人物である。だが、彼が学問的に成功したのは、美禰子という女性と交際をもちながらも、恋愛感情に流されず、常に冷徹な理性を堅持したためである。それは明治の知識青年にとつては、一つの理想型だったのかも知れない。作者はそうした野々宮と美禰子の結末を、美禰子から送られた「結婚披露の招待状」を引きちぎつて床の上に投げ捨てる場面をもつて締めくくっている。結末に至つても、破局の原因に気づかずにいる野々宮の無念の行為は、〈自然〉と〈当為〉の相克の深淵をのぞかせてくれる。その野々宮の姿に、教育を受ければ受けるほど、恋愛に対してうぶになつていく当時の青年たちの悲劇が託されている。

明治政府が富国強兵という旗幟を掲げて出帆して以来、知識青年たちにはその政策にふさわしい社会的〈当為〉が要求された。儒教的思想に根幹をおく〈家〉制度が強化されたのも、そうした国家の目標を推進するためであった。明治期の知識青年

私たちは、〈家〉のなかでは家の繁栄という名目下で家父長にその自我を蹂躪され、社会のなかでは国策によって〈当為〉をめざす人間としてのみ教育されていったのだ。そのような時代状況のなかで、知識青年たちは当然ながら自分の心のなかから芽生えてくる〈自然〉としての恋愛感情に素直に身をまかせざるほどの余裕をもたなかった。また身をまかせようとしても、これまで受けてきた「教育」の領域を越えることはできなかった。

そのような時代状況を「ペーコンの二十三頁」の言説が代弁してくれている。野々宮と美禰子の恋愛に「ペーコンの二十三頁」の言説を具現させながら、悲惨な結末を用意した作者の創作態度からは、そうした言説のもつ偏向性をみずから引き受けようとする強い意志が伝わってくる。「三四郎」では、恋愛に対する当時の知識青年たちの考えが近代市民社会を生きる者にふさわしいものであったのか、という問いが三四郎と野々宮を通してなされたといつてよからう。

注

本文中に引用した夏目漱石の文章は『漱石全集』第五卷（岩波書店、一九九四年）によった。

- (1) 片岡良一「中期の三部作―『三四郎』『それから』『門』―」（『夏目漱石の作品』鷺ノ宮書房、昭和四二年）
- (2) 三好行雄「三四郎（一）―（三）―」（『解釈と鑑賞』昭和四一年一月、三月）
- (3) 平岡敏夫「美禰子の結婚―立派な人の読み―」（『日本文学』第二四卷第十二号、昭和五十年十二月）
- (4) 秋山公男「『三四郎』小考―『露悪家』美禰子とその結婚の意味―」（『日本近代文学』第二四集、昭和五十年十月。のちに、玉井敬之・村

田好哉編『漱石作品論集成第五卷三四郎』桜楓社、平成三年所収）筆者は拙稿「『三四郎』冒頭部における「ペーコンの二十三頁」の意味と機能―『三四郎』論序説―」（『日本語と日本文学』第二十七号、筑波大学国語国文学会、平成十年八月）で、冒頭部において三四郎の目にする「ペーコンの二十三頁」の言説が、美禰子の「奴隷」とならざるを得ない三四郎の運命を暗示する隠されたテキストとして機能することについては言及して置いた。

(6) 内田道雄「『三四郎』論―上京する青年―」（『国文学言語と文芸』第七五集、昭和四五年三月。のちに、玉井敬之・村田好哉編『漱石作品論集成第五卷三四郎』桜楓社、平成三年所収）

(7) 飯田祐子「女の顔と美禰子の服―美禰子は〈新しい女〉か―」（小森陽一・石原千秋編『漱石研究』第二号、翰林書房、平成六年五月）

(8) 三四郎が美禰子と初めて言葉を交わすのは、広田先生の新宅においてであるが、三四郎を美禰子の「奴隷」に喩える「オルノーコ」の話が話題になる前の、二人で掃除をする場面に「三四郎は四つ這いになって、後から拭き出した」とある。その三四郎を見て美禰子は「まあ」と言っているが、このような仕事もやはり「奴隷」という言葉と無関係ではない。

(9) 千種・キムラ・ステイブンプン「あてにならない観察者―喜劇としての『三四郎』―」（小森陽一・石原千秋編『漱石研究』第二号、翰林書房、平成六年五月）

(10) 戸松泉「『三四郎』・叙述の視点」（『日本文学』第四一巻第一号、平成四年一月）

(11) 千種・キムラ・ティーン、前掲論文。

(12) 村岡正明「航空事始―不忍池滑空記―」（東書選書、平成四年）によると、飛行機が一般の人々に理解されはじめたのは、英仏海峡横断の飛行が成功した明治四二年七月以後のことであることが確認できる。

(13) 小山慶太「漱石とあたたかな科学」文藝春秋社、平成七年。

(14) 新保邦寛「我が内に潜むもう一人の我―谷崎潤一郎・初期小説論―」（『日本近代文学』第五十集、平成六年五月）

(15) 松下浩幸「『三四郎』論―「独身者」共同体と「読書」のテクノロジー

― (16) 『日本近代文学』 第五六集、平成九年五月

― 三好、前掲論文。

(17) 高田誠二『三四郎』と寺田寅彦 (小森陽一・石原千秋編『漱石研究』第二号、翰林書房、平成六年五月)

(オ ジュンヨン 筑波大学大学院博士課程 文芸・言語研究科 文学)